

私がこの道普請人の研修を通してケニアに行きたいと思ったのは、将来国際協力に関わる仕事に就きたい身として、道直しが必要なケニア農村とはどのようなところか、都市のスラムの実情はどのようなものか、そしてケニアの発展に貢献している日本人 NPO、NGO 関係者の方々はどのような人なのか、ということに興味があったからです。その観点から、今回の道直し研修の感想を書きたいと思います。

私たちは5泊6日のコクワルックという村でのヴィレッジステイをしました。毎日何をするかがホストファミリーの間で決められていて、多彩な経験をさせてもらいましたが、とくに次の3つのことが印象に残っています。1つ目は、私たちに対する彼らの親密さです。これは CORE がこの村と深い信頼関係にあるおかげですが、それを理由とするもの以上の親しみやすさを感じました。道ばたで、教会で、招待していただいた結婚式で、私が会う人に「チャムゲイ！」と現地の言葉であいさつすると必ず「チャムゲイ！」と、返ってきます。日本の希薄化する人間関係とは無縁の、この村の人々のホスピタリティは、私にアフリカの魅力の一端を見せてくれたように思います。2つ目は、彼らのタフさです。それが如実に現れたのが私たちのために行ってくれた道直しのデモンストレーションでした。コクワルックの人々は、時間にルーズな人が多いですがよく働き、道は私たち大学生も参加しましたが、彼らでテンポよく補修していく感じでした。彼らはタフです。握手すると手の皮が固いことから、手触りとしてケニアで農業を営むことの厳しさが伝わってきました。3つ目は、彼らの精神的背景が日本人のそれと違うということです。彼らはキリスト教を信じています。何人かから日本人の宗教観についても聞かれましたが、うまく答えられませんでした。外国の人と関わる際避けては通れないであろうこの話題に、自分はいかに無関心だったか気付かされました。

日本で普段目にしたり耳にしたりするアフリカのイメージは、貧しさ、危険さ、悲惨さを感じさせるものではないでしょうか。私も、ケニアを去る1日前のマトマイニ滞在中に、キベラスラムに入った直後は、正直言ってそうした印象を持ちました。ゴミと、ニオイと、見渡す限りのトタン屋根が、その理由です。しかし、そのスラムの学校（政府非公認の、地域の寺子屋のような学校）を見学したり、スラムにある自分の家の側に植林をしている方に話を聞いたりする内に、スラムに住んでいるからといって、経済的困窮やインフラ不足があるものの、まっとうに、助け合いながら生きる人がいることがわかりました。私は、自分が発展途上国の人のことをかわいそうだと思う前に、まず自分のなかにある、彼らと比べ個人主義的過ぎる部分の考えを改め、勉強できるチャンスを大切にすべきだと、スラムを見学して思いました。

この研修では、ケニアで草の根の活動をする日本の方に何人か会って話を聞くことができました。NPO 法人 CORE を運営する、園芸が専門の喜多さんと畜産が専門の松本さん、またストリートチルドレンや身よりのない子どもの教育と市民の職業訓練に取り組む NGO マトマイニの菊本さん、ケニアでお世話になったこの3人の専門分野はそれぞれ違います。でも3人が共通して私たちに話してくださったことは、人との出会いや機会との出会いを大切にすることでした。

この研修で得られた一番貴重な物は、様々な自分の中での気付きではなく、多くのケニア人、日本人との出会いだったのではないかと思います。